佐野　靖夫　博士（学位）請求論文審査報告書
論文題目：　初期アビダルマ論書における多変量構造解析

本論文は、「「仏」「菩薩」「涅槃」「煩悩」などの語句は同じでも、時代とテキストによってその意味内容は大きく異なることに着目し、ことに用語と教理がほぼ確定している説一切有部のアビダルマ論書の教理テキストを取り扱う場合、論書の成立に500年以上の開きがあったとしても、これまでの研究では無意識・無批判に同一のものとして取り扱うものがほとんどであったこと。一方、アビダルマ論書は、後の大乗系論書とは違って論理を超えた論理は設定しないこと。あくまで歴史上実在の釈尊の言説をアーガマとして尊重し、その矛盾点に対して論理でもって本意を斟酌しようとしたものだからであること。さらに説一切有部では、あらゆる事象を言語化しようとする試みがなされ、アーガマを論理的に再構築するための努力が強くなされたことから、アビダルマ研究に厳密な形でのテキスト・クリティックを試み、テキストごとにおける論理構造を究明したものである。

Chapter 1．アビダルマ論書における多変量構造解析の実際では、

Chap. 1－1－2－1．テキストマイニング〔I〕　単純文字数と文字種類数

Chap. 1－1－2－2．テキストマイニング〔II〕　語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築

Chap. 1－1－2－3．テキストマイニング〔III〕　同一語のチェックとTF-IDF（重み付け）では、テキストの特性を見つけ出すことを試み、コンテキスト・データベースを実際に構築し、論理構造を明確にする手法としてのネットワーク分析の概念を示す。

Chap. 2－1－1－1．　ケーススタディ〔I〕　愛染　単概念

Chap. 2－1－1－2．　ケーススタディ〔II〕　愛染　複数概念

Chap. 2－1－1－2－1．第三釈　vs　第四釈

Chap. 2－1－1－2－2．第三釈　vs　第五釈

Chap. 2－1－1－2－3．第四釈　vs　第八釈　vs　第十釈

Chap. 2－1－1－3．　ケーススタディ〔III〕　愛染　全概念

Chap. 2－1－1－4．　ケーススタディ〔IV〕　初静慮　論理概念

Chap. 2－1－1－4－1．正勝品

Chap. 2－1－1－4－2．静慮品

Chap. 2－1－1－4－3．通行品

Chap. 2－1－1－4－4．修定品

Chap. 2－1－1－4－5．覺支品

Chap. 2－1－1－4－6．縁起品

Chap. 2－1－1－5．　ケーススタディ〔V〕　初静慮　全概念

において、30 種類のネットワーク図を示し、単概念、複数概念、論理概念、全概念という複数種類の視点から論理構造把握をしようとする。

Chapter 3. 『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』における多変量構造解析

『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』にもこのテキストマイニングを行い、総数35 万文字を超えるテキストデータを取り扱うに際して、『法蘊足論』で開発したアビダルマ辞書を使用し、切り出しを行い、そこで発生した論書により新しく出てきた語句について、その語句を新たに辞書に含め、再度切り出しを行うということを繰り返している。

さらには、『品類足論』において「初静慮」、『集異門足論』において「愛染」、比較として『倶舎論』において「愛染」「初静慮」の概念をみることから、『法蘊足論』を含めて各々の論理構造の同異を考察している。

Chapter 4. アビダルマ教理をめぐる諸問題

Chap. 4 – 1. アビダルマにおける業伝達の解釈

Chap. 4 – 2. 三世実有と現在有体過未無体――時空座標解釈からの試み

Chap. 4 – 3. 禅定体験の記号言語化について

Chap. 4 – 4. 諸心起染

Chap. 4 – 5. 大不善地法成立に向けての論理構造分析

とくに「大不善地法成立に向けての論理構造分析」においては、数量化 III 類、コレスポンデンス分析を試み、本研究をはじめる大きな契機となったものであると述べる。

Conclusion: 初期アビダルマ論書における多変量構造解析――結論と展望とによせて以上の論究をふまえての結論としている。

本論文はテキストに記述されたもの以外のものは存在せず、テキストに記述された以上の意味でも以下でもないことを示し、その前提をもって研究している。そしてそのテキストに提示された範囲と限界を明らかにしようとし、基礎作業を行うことを目的として、コンピューターを使用しコーパスを解析する。文化情報学、統計学等で成果を上げてきた手法を仏教学のアビダルマ研究という分野に適応し、これまで不可能であったテキストの全数調査を試みようとしたものである。

Conc. 1 – 1. 思想史における非連続と連続 において、本研究の取り扱う思想史の基本的捉え方として、従来の「連続」的展開から「非連続」的展開というパースペクティブの変換を論じ、本来テキストは「非連続」によって成立するという立場を述べる。

次に Conc. 1 – 2. クラスター解析にみる初期アビダルマ論書 において、『法蘊足論』『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』の5論書に出現する同一語を抽出した結果に対して、クラスター解析を試みたものである。その結果、5論書の傾向を機械的にグ

ループ付けしたものが、従来の研究に一致することが見て取れた。そして細かいグルーピング結果からは、その特性を見る事ができる。

次の Conc. 1－3. ネットワーク分析結果よりみた初期アビダルマ論書の論理構造が本研究における直接の結論にあたる。論理構造自体を表わすものはネットワーク図もしくは表形式のものである。またそれを補完する詳細なデータは別冊の資料編に載せてある。その結果、個別テキストにおける論理構造の把握にひとつのモデリングを提示できたように考える。この手法の結果は、テキスト記述のすべてを網羅するものであり、テキストに記述されていないものはひとつも含まないことを想定しているものである。そして【補 － 1】付論として、Chap.4 の続きでもあり、非連続モデルの例としてとりあげた「『大毘婆沙論』見蘊見納足遡及の外道と異部」の論と資料を付している。

この論文の仏教学研究における最大の貢献は、個別概念の論理構造の分析にネットワーク分析という方法を導入した点にあると考えられる。ネットワーク分析は、文章分析において単語の結びつきを図示することで文章の特徴を把握するために用いられることがある。単語の結びつきに関しては矢印をつけることによって指向性も表現できる。佐野氏はこのことを利用しアビダルマ教理の相互関連性を提示することでその論理形態を図式として把握可能にし、論書テキストに言及されている事柄の範囲を図式として把握できるようにした（例えば図 28）。特に、共通のタームを用いてネットワークを構成することによりテキスト間の論理形態の比較が容易になること示した意義は大きい（例えば図 13）。

論理形態の比較にネットワーク分析を用いた研究は初めてではないかと思われる。ただ、比較的シンプルな概念であれば図示可能であるが、複数概念を組み合わせた複合的概念になると、２次元平面上に図示することは困難になり、判断そのものが難しくなることが予測される。今後の課題として、この点に関し言及が必要であろう。

次に、この論文では Chap. 2, 3 でネットワーク分析、Chap. 4-5 でコレスポンデンス分析、Conc. 1-2 でクラスター解析という異なる統計解析手法を用いているが、ネットワーク分析に加え何故コレスポンデンス分析、クラスター解析も用いたのか、これらの手法の長所、分析内容に関しもう少し説明を加えた方が良い。なお些細なことであるが、コレスポンデンス分析では累積寄与率を示しておく必要がある。

小乗仏教中、もっとも多くの文献資料を有する説一切有部の論書の教理をコンピューターによって解析するという画期的な研究であるが、論者が述べているように、まだ十分に究明されたわけではない。いわゆる新しい分野の草分け的研究であるといえる。副論文にあるように解析されたデータを印字すれば、膨大な量となるが、これによって六足論の教理の諸問題が解決されたわけでもない。

しかし、このような地道な分析を足がかりとして、さらに漢訳で200巻もある『大毘婆沙論』や『倶舎論』などの教理もより鮮明に解析できるであろうし、アビダルマ教理研究が新たな段

階に入ることになるであろう。よって、斯学に供すること大であると認め、課程博士論文として優れたものと評価する。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成28年1月28日に公聴口頭試問をおこない、論者の研究の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断し認定する。

平成28年1月28日

主査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　三友　健容
副査　同志社大学大学院文化情報学研究科
文化情報学専攻
教授　村上　征勝
副査　立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授　高橋　堯英